
あきる野市民の戦争体験を聞く会

プログラム

お 話

- 私の原爆体験：10歳のとき目の当たりにした被爆後の長崎の惨状……原 一美さん
- 「満州」での見聞：17歳の頃、戦後1年までいた「満州」で見聞きしたこと……南 知子さん
(休憩)

紙芝居ビデオ特別上映

- 「五日市線空襲」の記録

懇 談

あきる野9条の会 2005.11.19 (中央公民館)

私の原爆体験 (20年8月9日 11:02)

原 一美 (油平在住)

私は、長崎県島原半島の南部で昭和10年8月10日、専業農家の次男坊として生まれました。長崎市に原子爆弾が落とされた昭和20年8月9日は、国民学校四年生でした。太陽がジリジリッと照りつける中、前の海でたこ捕りをしていた時、突然、警戒警報が発令されました。その時期、ひんぱんに空襲に襲われ停泊中の漁船に機銃掃射をあびせたり、三池炭坑から石炭を満載した輸送船が有明海を出ようとするところを、何処からともなく飛来するグラマン戦闘機やB29が集中攻撃で轟沈させてしまうのです。また、頭上では零戦戦闘機が空中戦の未落とされていくのです。まさに目の前や頭上が戦場となっておりました。

まもなく空襲警報が発令された。海の中に身を沈めながら海中から首だけ出して空を見上げますと、大牟田の方面から有明海上空をキラリと光る機体が2機、頭上を通過し千石湾の方へ消えて行きました。あれはB29だ。…通り過ぎただけで済んだのでホットして周りの人達がささやき合っていたところ、ズズーンと体を感じる大きな音が聞こえました、すると雲仙岳の西方から黒くて巨大な雲の柱が立つと、見る見るうちに雲の裾が空一面に広がり、黒い影がサーッと襲って来ました。真昼が一変して夕闇のようでした。

怖くなり家に駆け戻った所、近所の人達が家の周りに集まっていました。其処へ隣の郵便局の人が興奮しながら「長崎が新型爆弾で全滅だ、駐在所に知らせに行く」と叫びながら走り去って行きました。集まった人達は新型爆弾と聞いても分からずに辺りが暗くなったことや大きな音に驚き、ただ気味が悪かネーと雲を見上げていました。長崎が全滅だと聞いた人達が、私の家には三人の叔母たちが長崎市内に住んでいるのを知っていましたので、心配して集まっていました。

幸いなことに、浦上と竹の久保に住んでいた二人の叔母は、毎日のように空襲で近くの三菱製鋼所や三菱兵器製作所等が爆撃を受けるのと「8日8日長崎は灰の町」と書いたビラがまかれたので、8月7日に逃げて来ておりました。その為、被爆だけは免れた訳ですが、夕方になっても被害の状況は皆目判りませんでした。三番目の叔母は諏訪神社の近くに住んでいましたが、疎開はしておらず連絡も取れない状況でした。その夜、祖父母、母、叔母たちは遅くまで話し合い、確認に行くしかないと決まりました。父や伯父は召集され戦地だし、伯母二人と自分が行くことになり翌朝10日早

朝出かけました。

島原鉄道で愛野駅まで来た所、大勢の人たちで大混雑、その人たちの情報から長崎市内の様子がいくらか判って来ました。新型爆弾で浦上付近が全滅であること、死人と怪我人がたくさん出ていること、諫早駅は怪我をした人々が運び込まれホーム一杯であること、諫早から先汽車には乗れるかどうかとか、浦上付近は全滅で現在も火の海である事等などがわかりました。

諫早についたところ、ホームには噂の通り大勢の怪我をした人たちが手当を受けていました。顔ははれ上がり火傷で肉が露出した人や、体の皮膚が裂けはがれボロキレのように垂れ下がっている人、ホームにはすでに息絶えた人、水、水、水、薬、大混乱でした。暑さと異臭が漂う中、どうすることもできずふるえて立ち尽くしてしまいました。伯母たちにせかさされその場所をはなれ、家族や友人を探しにいく人たちの群れの汽車に加わり、かなりの時間がかかりどうにか道ノ尾駅につきました。そこで汽車からは降ろされました。そこから先は歩くしかありませんでした。ここでもプラットホームも駅舎の中にも負傷者でいっぱいでした。血に染まって息絶えた人、手や足を失った人、駅前の広場にむしろがけの救助所が設けられていて、むしろの上ですでに死んでいる人もいました。みんな着ている服は焼けて裸同然の姿でした。次々に怪我した人達を運ぶトラックがひんぱんに出入りする道路を避け、線路を歩きました。進むにつれ、線路の両端は爆死した人で悲惨な光景になっておりました。

肉親を探して動かなくなった死体を一人一人確かめながら歩いている人、名を呼びながら探す人、変わり果てた子供を抱きしめる母親、歩く先々の全てが修羅場でした。線路を歩いていると「水、水」死体かと思う人の手が動いて水を求めるのです。気丈夫な上の伯母も尻餅をついて座り込んだのをはっきり覚えています。それから下を見ないようにして前ばかり見て歩きましたが、大橋の浦上川に来た時は、あまりのむごさに足がすくんでなかなか鉄橋を渡れませんでした。川には大勢の人が浮び、中には内臓が飛び出し川の流に漂っているのです。首の無い馬、体半分が無い牛も浮いていました。大橋から先は白骨体があちこちに横たわり、また炭のように真っ黒に焼かれた人もいました。くすぶっている線路の枕木を避けながらさらに歩きましたが、辺りは燃える火と炎、立ち込めるけむりのなかに、竹の久保、浦上は跡形もなく消えておりました。張り詰めた心はもう極限に来ていました。飲みたくても水は汽車の人ごみの中で無くし、大切に持ってきたおにぎりも無くなり朝から飲まず喰わずでした。今度は落胆はなはだしい伯母たちを励ましながら、今来た線路を引き返し道の尾を過ぎた畑で夜を過ごしましたが、空腹と辺りで人を焼くにおい、血の匂いがしてほとんど眠れませんでした。朝が来て驚きました。自分たちだけかと思っていたら周りと同じような人達が大勢いました。中には其処で息絶えた人、子供を背負ったまま倒れていた人もいました。

8月25日、浦上の伯父が最初に復員してきました。又行くのはこりこりでしたが伯父と27日に長崎に行きました。家は浦上駅前であり青果商を営んでおりました。長崎大学病院が近くにあり高級果物がよく売れたそうです。家とお店があった辺り一面跡形もなく焼け野原となり、浦上駅、三菱製鋼所、三菱兵器工場、全てが破壊され鉄骨が絡み合い網の目のような姿に変わっていました。焼け野原に黒こげで熔けた大砲がポツンととりのこされていたが、どこからか飛ばされて来たんだと思いました。浦上天主堂も瓦礫と変わり果て、周りにあった石像の首が爆風で吹き飛んでなくなっていました。近くの神社に1本足の鳥居が残っていたのがとても印象に残っております。浦上地区はまるで整地された更地のようで、土はレンガ色に焼け所々黒く変色した場

所がありました。後で知りましたが遺体を焼いた後だったそうです。

3番目の叔母は、爆心地から少し離れた諏訪神社の近くに家がありそこで被爆しました。当時我が家には電話が無かったので、連絡は隣の郵便局へお願いしておりました。被爆で大半の電話回線は破壊され連絡が取れなく、祖母は娘の安否を気遣い狂ってしまうのではないかと思うほどでした。長崎まで行ったのにどうして見に行かなかったと責められました。浦上から先へはあの時の極限の精神状態では、女や子供では瓦礫と火炎の中には入れません。家がなくなったのを見届けるまでの使命感と万が一の期待感、そして失望、幾ら責められても其処までが限界だったと思います。もしそのとき市内へ入っていたら、私たちも放射線二次障害を受けていたかもしれません。叔母の怪我は小指を切断しておりましたが治療は赤チンをつける程度で、救護に追われる毎日で痛いはずなのに周りのけが人を見ていると不思議と痛みを感じなかったそうです。原爆が投下された時の様子は、爆心地からは山の裏側に位置した為、熱線は受けず大きな音と同時に一瞬にして畳や障子、ガラス戸等が屋外に吹き飛んだそうです。家は半壊し、床は土台と共に浮き上がっていたそうです。その朝、発令されていた警戒警報も空襲警報も解除され、空爆も無くほっとしたときに突然の爆発音で驚き、家の柱につかまったところを爆風で屋外に飛び出したときに何かに小指を千切られたのだろうと言っておりました。

その叔母は終戦の翌年長女が誕生し二女三女と3人の子供に恵まれましたが、三女を生んだ後、放射性大腸炎を発症し家事や子育てが出来なくなり、私が高校二年の秋にS高校を休学して子守り、カステラ製造の手伝いとして派遣されました。一年半役目を終え、S高校に復学をしました。現在叔母は85歳になりますが20年来入退院の繰り返しです。そのとき生まれた三女が母親となり生まれた子供が染色体異常と言う障害を抱え30年位の寿命とされております。

二世三世にも及ぶ原爆障害の恐ろしさです。

又、私は6歳の時、浦上の伯父の家に養子として連れていかれ、入学は長崎市内の学校のはずでしたが、どうしても嫌だと1年で生家に戻りました。代わりに3歳の弟が養子として迎えられ、夏になると毎年実家で過ごす習慣となっていました。当時は4月ごろから長崎空襲が激しくなり、長崎駅や近くの兵器工場に爆弾が落とされるようになり、歩行に障害を抱えた祖父と二人が実家に疎開していたので被爆を免れました。

今日まで、体験を語ることはしませんでした。今年8月10日で私も70歳になり、今のうち1人でも多くの方々に原爆爆弾の殺傷力、残酷さ、放射線の恐ろしさ、非人間性を少しでも知っていただけたらと言う思いから、話をしてみたいと思うようになりました。あまりにも衝撃的体験であつたのと、8月10日は自分の誕生日と重なっていた為、60年過ぎた今でもはっきり覚えておりました。被爆により長崎だけでも死者74,000人、負傷者75,000人、かろうじて死を免れた人々も、心と身体に癒すことが出来ない深い傷を負い、今なお原爆後障害に苦しみ、死の恐怖に怯えているのです。

私も投下された直後、2度現地に入り行動した為、間接的に放射能を浴びたのではないかと、体調がおかしくなるたびに不安でした。家族を探しに来た人や救護活動に島原から駆けつけ救援に関わった知り合いの長崎医大の学生、その他当時被災地には入られた大半の人々が二次放射能を受け死亡したり、被爆後障害とたたかって居られるのです。

この一年間に新たに死亡が確認された人々2,748人が死没名簿に加えられ、総計

137,339人と報告されています。熱線で皮膚に火傷を受け強力な爆圧で皮膚は剥離削げ落ち、又熱線で瞬時に黒焦げにされた方々の姿が鮮明に浮かんで来ます。子供だったとは云へ目のあたりにした惨劇に驚き助けを求めた人びとをどうすることも出来なかった事を、心の傷として長い間抱えてきました。

今、憲法 9 条が変えられようとしています。たくさんの方たちの尊い犠牲の上で 60 年、9 条があつたからこそ平和が築かれ今の繁栄が得られたのだと思います。この戦争で、世界最初の被爆国であり、戦争時には 300 万人を超える人命が失われ、世界では 2,000 万人の人々の命が奪われています。9 条では 1 項で「戦争と武力行使の永久放棄」、2 項で前項の目的を達する為「戦力不保持」を決めました。

しかしながら、今憲法改正論が取りざたされており、最大の焦点とされた 9 条の見直しについて、先月示された(自民党の)新憲法草案では 9 条 1 項はそのまま残されましたが 2 項の戦力不保持と交戦権の否認の規程が削除され自衛軍の保持が明記されており、

本当に 9 条は変えたほうがいいのでしょうか。

皆さんはどう思われますか。

先月 10 月 10 日から一週間、長崎に滞在しました。記憶をたどりながら 3 日間、原爆中心地周辺を歩きました。10 月だというのに気温は毎日 30 度を越え、雲ひとつ無く 60 年前のあの日と同じでした。熱線で焼かれて瞬時に黒焦げにされ息絶えた人、顔や、手や足にやけどを負い、さらに 8 月の太陽に照り付けられて水を求めた人達、水、水、当時が脳裏に明白に蘇ってきました。目の前がクラクラしめまいがして倒れそうになりましたが、あきらめず原爆の碑や遺跡をたどり、それぞれにお祈りをしました。新しくされた遺跡や記念館、なくなった遺構、大切に保存された遺構など長崎壊滅の日から 60 年、その証しは当時のまま残されており、長崎を訪れる世界の人々に核兵器の恐ろしさ、悲惨さを訴え続けるものと思います。

「満州」で見聞きしたこと

南 知子 (伊奈在住)

別紙

紙芝居 (ビデオ復刻) 「五日市線空襲」

作 永井 美枝子 (二宮・故人)

紙芝居は「秋川の戦争を語りつぐ会」代表の永井美枝子さんが 1980 年 8 月に製作。永井美枝子さんが亡くなった後、1995 年に長男の永井榮亮さん (二宮 玉泉寺 住職) がビデオにしたもので、ナレーターは永井素子 (榮亮さんの妻) さんです。



憲法 9 条で平和を守る
あきる野 9 条の会
事務局：二宮 1421-4
発行：2005 年 11 月 19 日